

青年団との植樹、始動までのワタワタと成長

missy

タンジュン・ハラパン村の青年団がやっと動き出した。

今年の6月頃、FNPFを退職してから村での活動に注力することにしたアドゥが仕掛け人となり、“有名無実”状態を脱却して体制を新たにした青年団。これまでFNPFを窓口にした植林などの活動をしてきたウータンでは、FNPFが影響を与えてきた村の人たちのさらなる活動の発展を見守り・支えるために、青年団との協働に踏み切った。スタートとして取り組んだのは、9月のエコツアー実施²と村内での植樹&苗床づくりだ。



◆メンバーたちのあれこれ

団長に指名されたイラは、初めこそ自信なさげにモジモジすることが多かったものの、「勉強したい」という意欲が人一倍強く、みんなの取りまとめや様々な外部者とのやり取りを積み重ねるうちに顔つきが変わってきた。メンバー内最年長で副団長のフルカンさんは、寡黙で働き者。人前に出るタイプではないものの、エコツアー最終日に開かれたお祭りでは司会を務め、その姿を見た息子のフェブリ³が「親父が人前で喋ってるのを見るのは初めてや！すげえ誇らしい。でも俺がおったら恥ずかしがるから、こうやって隠れてんねん」と大喜びしていた。

34人の青年団メンバーは個性・特性豊かだ。肉体労働に進んで手を挙げる人もいれば、「書類作ったりする時は（勤め先の）ホテルでパソコン使える様に口聞いてやる」と事務面で頼りになる人もいる。もちろん、個性も仕事も違うメンバーたちが集まると多様な意見が出る。あるミーティングでは、植樹や苗床づくりに誰が・いつ参加するかという話し合いで、「大半はアブラヤシ農園勤務やねんから日曜日の作業がええやる」「俺は国立公園で働いてて休日ねえよ。でも出勤時間が遅いから朝やったらいつでもできる！」「夕方に少しずつ進めりゃええやん。でも毎日メンバーが変わったら賃金の分配はどうする？」「メンバーは決めなあかん！植えた奴が後の管理もするもんやで」などなど、收拾をつけるのに苦労していた。



ただ、側から見ていて嬉しいのは、数ヶ月前に私が初めて参加した集会の時とは目の色が変わっていること。沈黙やモジモジが多かったり、それに耐えきれず関係ないお喋りを始めてしまうようなミーティングをしていた頃とは違い、メンバーたちは色んな用事の合間を縫ってでも毎日のように集まり、短時間のミーティングを有効につかって盛んな議論をするようになった。

¹ 小卒で社会に出たアドゥは、25歳にして森林保護・再生をしている地元NGO・FNPFでの勤務経験が13年になるという若手ベテラン。その経験に加え、勤の良さや人脈の広さなどから青年団メンバーを始め多くの人に頼られる存在でありながら、周りの成長を願って自身が出しゃばりすぎないように工夫する器用さももつ。

² ウータン会報誌126号「2017エコツアー報告（副題）ツアーは変わる、現地も変わる、人は・・・」を参照

³ ウータン会報誌123号「村人の生い立ちから見つめる、カリマンタンの生活」を参照

◆”変化”って何？ ”良くなった”って何が？

私が村に入ったのが10月下旬、それから11月上旬に植樹をスタートするまでの間、毎晩のようにミーティングをしたり中心メンバーで電気が消えるまで⁴話し合ったりした。私は朝寝坊ができるから良いものの、大抵のメンバーは朝早くからアブラヤシ農園などに出勤する生活。しかも、この時期は毎日夕方はバレーボール、夜はバトミントンの大会が村内や隣村であり、地元の人にとってはプレーするも観賞するも逃せないイベントだった。その合間を縫って、本当によく毎晩、毎晩集まって脳ミソ爆発するまで話し合ったなあと、脱帽する。

そんな中、ある晩の雑談でアドゥが「青年団、よくなったで。この間みんなを見てて、ほんまに誇りに思ったんや。真剣に学ぶ姿勢のある奴はまだ数人だけやけど」と話し始め、「前より良くなったよなあ」と返すイラ。それを見て内心どうも納得いかない私。「うーん、でた、この返し。ほんまに青年団、特にイラは変わったんやけど、その”変化”が何なんか認識してんねやるか？」という心の声に従って尋ねてみた。「”良くなった”って例えばどんなことやる？」”例えば何？”と聞いても抽象的な答えが返ってくるのはお決まりで、粘り強く具体的に聞いてみる私。「あのね、私が村に来た時『いつ帰る？（=いつまでに植樹終わらせたいかい？）』って聞いたよね？それに答えた時、あんなんて返したか覚えてる？」「『な～んや、まだ先か』って言ったよね？で、植樹の予定日いつやっけ？」「植樹メンバー決めるのに何日かかった？」などと振り返った後に、「あの時は植樹するのに何を決めるのか、どれくらい時間がかかるか知らずに、すぐ終わると思ってた。それが、今は経験して分かった。”知らなかったことを経験して知る”って青年団が”良くなった”ってことちゃう？」という結論に至る。イラが完全に納得したかは不明だが、これからも経験の言語化を通して学びを深めていってほしい、というかそのお手伝いを私はしていきたいと改めて思った瞬間だった。

◆やれやれ、やっと植樹開始・・・そして今

そんなこんなで実現した村での植樹。場所選びにも苦労したのだが、最終的に彼らが選んだのは村内に新しくできる予定の道（街路樹として）と中学校前の空き湿地。苗木の生育を保証するために、植樹後3ヶ月に1回の管理も予定しているが、イラはその作業予定より前に苗木の確認をして写真を送ってくれた。今の時点では80～90%の生育率だそう。彼とは日本からチャット・アプリでやり取りしているが、最近自分の家の周りにも果樹を含むいくつかの地元種の木を植え始めたと教えてくれた。樹種について質問すると、その特徴についての話が止まらない、止まらない（笑）そんなイラ率いる青年団を、これからもウータンのみんなと見守り・支えていきたい。



⁴ タンジュン・ハラパン村では、ディーゼル発電機を夕方から深夜までに限って回して発電し、各家に電気を供給している。消灯時間に議論が終わらない夜は、家にあるソーラー発電または充電式のランプや懐中電灯、または携帯のライトで手元を照らしながらノートにメモしたりしながら話し合いを続けた。